

公立大学法人 京都市立芸術大学（学長：鷲田清一）は、2016 年 2 月 20 日（土）から 3 月 21 日（月・祝）まで、京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA にて、ベルギーとオランダを拠点に活躍する奥村雄樹の京都初個展を開催します。

奥村はこれまで、「私」の不確定性や作者性をテーマとしながら、他者との協働や美術史への言及性が高いコンセプチュアルな作品を制作してきました。本展では、河原温との会遇に着想を得たサウンドインスタレーションの新作を発表します。

奥村はこれまでも河原温の仕事をめぐる作品を発表しており、本展出品作もその延長線上に捉えることができます。本作は、河原温が「河名温」として登場する宮内勝典の小説「グリニッジの光りを離れて」を原作としており、60 年代後半の NY の空気感、河原の作品が内包する宇宙的な時間の広がりや名前とアイデンティティをめぐる問題、奥村の自伝的な要素等の重層的な題材が、作品に通底する精緻なコンセプトに支えられることにより、高い同時代性をもった表現として成立しているものです。是非この機会にご高覧くださいませようお願いいたします。



《河原温の純粹意識 あるいは多世界（と）解釈》
2012 9 人の同時通訳者によるパフォーマンス 東京国立近代美術館にて
撮影：中川周

「あ、きみの名前、正確な綴りをここに書いてくれないか」
河名温が、新聞広告の余白を指さした。働いたことの無い細長い指だった。
「なんで？」
私はいつもの癖で、つい反射的に身がまえた。名前と聞かたびに不安になるのだった。
「こんなのも作ってるんだよ」
《I MET》という一冊しかない手作りの本だった。ファイルブックに、タイプ用紙がはさみこんであり、一ページが一日分で、そこに人の名前だけが記されていた。毎日、毎日その日に会った人の名前を記しておくのだという。（中略）偽名ではなく、本名を書いた。ニューヨークで暮すようになってから、本名を書くのは初めてだった。宇宙空間へ流すタイム・カプセルかなにかに自分の名前が記録されるような面映ゆい気分だった。なにがとも起こらないこの無名の一日が、途方もない永遠の真ただ中に据えつけられ、記録されているような気もした。

宮内勝典「グリニッジの光りを離れて」（河出書房新社、1980 年）より

<http://www.vukiokumura.com/>



Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —



-2-